復活節第７主日礼拝説教「高いところから失礼します」

日本基督教団石神井教会　2019年６月２日

【使徒書日課】使徒言行録　1章12～26節

12使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この
山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。13彼
らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハ
ネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイ
の子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。14彼らは皆、婦人たち
やイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。
15そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一
つになっていた。16「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユ
ダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は、
実現しなければならなかったのです。17ユダはわたしたちの仲間の一人であり、
同じ任務を割り当てられていました。18ところで、このユダは不正を働いて得た
報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中か
ら裂け、はらわたがみな出てしまいました。19このことはエルサレムに住むすべ
ての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土
地』と呼ばれるようになりました。20詩編にはこう書いてあります。
『その住まいは荒れ果てよ、そこに住む者はいなくなれ。』
また、
『その務めは、ほかの人が引き受けるがよい。』
21-22そこで、主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの
洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一
緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人にな
るべきです。」23そこで人々は、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、
マティアの二人を立てて、24次のように祈った。「すべての人の心をご存じであ
る主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示しください。25ユ
ダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、使徒としてのこの任務を継
がせるためです。」26二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、こ
の人が十一人の使徒の仲間に加えられることになった。

【福音書日課】マタイによる福音書　28章16～20節

16さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に
登った。17そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18イエ
スは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。
19だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに
父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20あなたがたに命じておいたことをすべ
て守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にい
る。」

《昇天》から《聖霊降臨》へ

教会は、先週木曜日の「昇天日」を経て、来週には「聖霊降臨日（ペンテコステ）」を迎えます。教会が定めてきた特別な暦（教会暦）は、主のご降誕に備える「待降節」から始められて、「降誕」と「公現」の祝い、「受難節」の祈りと「復活」の記念を、およそ半年かけて憶えてきました。それは、御子として地上においでくださった主イエスの御業を順に心に留めていくために定められた暦です。その暦に従って歩む季節も「聖霊降臨日」まで。それはつまり、そこにわたしたちの一つの「ゴール」があるということです。主イエスと出会い、その後に従うようにされた者の導かれた先にある「目的地」です。主イエスは、その「ゴール」にわたしたちをお連れくださるために、あの地上での御業のすべてを為してくださったのです。「聖霊降臨」という「ゴール」です。

もちろん、それは、わたしたち自身の歩みがそこで終わる、ということではありません。むしろ、そこに至って初めて、わたしたち自身の歩みが始まるのです。ただ、主イエスが先に歩んで為してくださっている御業にひたすら目を向け、その御言葉に耳を傾けてきたわたしたちが、今や、自分の足で立ち、自分の手で何事かを為し、自分の口で語り始めるようになるのです。

それは、しかし、かつて自分の足で立っていると思っていたときとは違うものです。かつて自分の手で為していると思っていたときとは違うこと。かつて自分の口で語っていると思っていたときとは違う言葉。新しい立ち方、新しい手の働き、新しい言葉が、わたしたちの中で始まるのです。それは、小さな違いではありません。わたしたちの心の向きが百八十度変わるのです。「人」から「神」へ、「自分」から「他者」へ、「分裂」から「一致」へ。そのために、主イエスはご降誕から昇天まで、わたしたちを、導いて来てくださったのです。

この世界で分裂から一致へと向かう道を歩むのは、困難なことです。わたしたちの外からも内からも闇の現実が押し寄せ、人の心も、人と人との絆も、引き裂こうとしているからです。それでも、わたしたちは、間違いなく、その困難な道を行くように導かれてきたのです。その道を確かに前に進んで行くことができるようにと、この年も「聖霊降臨」の祝いへと向かわされてきたのです。

60 年前の 1959 年、「聖霊降臨日」の前の日曜日に、「東アジア・キリスト教協議会」が発足しました。そのとき、かつてわたしたちの国が起こした戦争の惨禍によって荒れ果てた東アジアの人々の中のキリストに従う者たちが、分裂を乗り越えて一つになるためにと、共に祈り始めました。それ以来、「聖霊降臨日」の前の日曜日を「アジア祈祷日」、その一週を「アジア・エキュメニカル週間」として憶えることがされてきました。けれども実際には、わたしたちはこの祈りへの招きを、ほとんど蔑ろにしてきてしまったかもしれません。

それを埋め合わせるには小さなことですが、来週の「聖霊降臨日」の祝いに、わたしたちは、そのような道を行く者として、一つのしるしになる礼拝をしようとしています。普段別々の礼拝にあずかっている子どもたちとわたしたちが、共に祝いの礼拝をするのです。そこから、もう一度歩み直したいのです。

欠けがあっても

今日の福音書日課（マタイ 28 章）は、ご復活の主イエスがガリラヤの山で弟子たちとお会いくださって、最後の御言葉をお告げくださった出来事を伝えています。「大宣教命令」として知られる場面です。

この場面は、おそらく、ルカ福音書や使徒言行録が伝えている主イエス昇天の出来事と同じことを伝える場面なのでしょう。今日の使徒書日課（使徒 1 章）で「**使徒たちは、『オリーブ畑』と呼ばれる山から…戻って来た**」と語り始められる直前には、主イエスが天に昇られた様子が描かれています。ガリラヤの山と、エルサレム近郊の山とでは、明らかに違う山ですが、ご復活の主イエスが弟子たちの前に現れてくださった出来事が一度ではなくいろいろな形で起こったように、わたしたちが「主の昇天」と一言でいう出来事も、ただ一度経験されたこととしてではなく、繰り返し重ねられた経験の言い伝えなのかもしれません。いずれにしても、山は違えども、そのときに合わせて主イエスが 11 人の使徒たちに最後のご指示をされたということは、共通のことです。

そのとき、主イエスによって「使徒」と呼ばれた弟子たちは、11 人になっていました。あのイスカリオテのユダが欠けてしまっていたからです。使徒書日課が伝えるのは、そのユダの欠けたことを補うための一人が選ばれたという逸話ですが、マタイ福音書には、そのような補充がされたことは語られていません。あえてそのようなことを語り加える必要はないと考えたのかもしれません。

実際、教会は、最初の時代から今日に至るまで、いつも、主がお選びくださったはずの者の一部が欠けた状態を続けてきました。わたしたちの教会でも、教会の営みのための大切な務めとして「役員」を選ぶことを毎年しますが、必要な人員を確保できずに欠けた状態で一年を過ごしたこともありました。他の奉仕の務めにしても、十分な奉仕者が確保できているわけではありません。いいえ、そもそも、教会員ということからして、教会はいつも欠けを生じながら歩んでいるのです。多くの教会で、毎週の日曜日に集まるのは、名簿に載っている教会員の半分程度です。十二分の一どころか、二分の一が欠けた状態で、教会は毎週の営みを重ねています。しかも、その欠けの中には、明らかに、あの「**ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった**」と言われているのと同じような意味で離れてしまったと言わざるを得ない方たちも、いらっしゃるのです。

それでも、教会の営みは、なお保たれてきましたし、今も保たれています。これからも保たれるでしょう。教会が主の御業を担うために欠けを補う必要があるならば、主ご自身がお選びくださり、ふさわしい人をお立てくださる。それが、聖霊降臨を迎える前に集まって共に祈るわたしたちの信仰なのです。

そうであればこそ、マタイ福音書は、あえて、十二弟子が一人欠けて「**十一人**」になっていたことをそのままに語ったのかもしれません。その欠けを、恐れる必要はないのです。その欠けを、無理やり埋め合わせる必要はないのです。その欠けた「十一人」のままで、主は、弟子たちにご自身の権能を託され、主の御業の務めを果たさせるために、この世にお遣わしになられたのです。

主の務めを受け継ぐために

わたしたちの願いは、来週の聖霊降臨の祝いに、降誕の祝いよりも、復活の祝いよりも、もっと多く、一人も欠けることなく集ってくださることです。実際には、そうはいかないでしょう。多くの欠けを持ったまま、来週の聖霊降臨の祝いを迎えることになるはずです。

そのような現実を見るとき、どうか、恐れないでいただきたいのです。聖霊降臨にあずかる教会が、多くの欠けを持ったままで、いったい何ができるだろうかと、不安を抱かないでいただきたいのです。とは言え、皆さんが一点の疑いも持たない強い信仰を持った人となるべきだ、というのではありません。ガリラヤの山で復活の主イエスのもとに集められた十一人の弟子たちの中にさえ「**疑う者もいた**」のです。それを、マタイ福音書は、「こんなとんでもない奴がいた」と言っているのではないでしょう。「**疑う者**」さえ、主イエスは、弟子たちの中から取り除かれることなくそのままに「**十一人の弟子たち**」として、ご自分の権能をお与えになられて、御業の宣教のためにお遣わしになられたのです。それが主イエスの御業を託された教会の姿なのです。

それは、嘆かわしいことでしょうか。いいえ、むしろ、喜ばしいことなのではないでしょうか。喜びの知らせなのではないでしょうか。わたしたちの中に「**疑う者**」がいても、そのままに「教会」として主が御業を託してくださり、用いてくださるのです。弟子たちの教会では、わたしのような者も、どんな人も、そこに招かれて一つに集められているというだけで、主に用いられ得るということなのです。教会とは、そのようなところだ、ということです。

わたしたちは、そのことを本当にわきまえて、教会の営みに加わりたいのです。わたしたちは、信仰という一点で教会に集められています。しかし、その信仰というものを基準にして、自分や他の兄弟姉妹を評価するようなことは、しないのです。だれがより信仰深いかとか、誰の信仰が疑わしいかとか、自分のことにしろ、他の人のことにしろ、わたしたちは無意識に考え、口にしていることが多くあります。それは、しかし、弟子たちが主イエスのもとで「誰が一番偉いか」と論じたのと同じ過ちを犯すことです。主イエスは、わたしたちの信仰深さとか、疑いの有無など、問題にされないのです。ただ、主がご自身のもとにお呼びになった者が、そこに集まってきている。そのことだけで、主の御業を託された教会の働きに加えられるのには十分なのです。

ヨセフとマティア。推薦された二人のどちらがユダの欠けた任務にふさわしいか、弟子たちは自分たちでは決められませんでした。くじを引き、主にお決めいただきました。それでよいのです。ユダの任務だけでなく、教会の働きは、本来そのように決めても何の問題もないのです。

そのような教会に、主は聖霊をお送りくださいます。聖霊による洗礼を、お定めくださいます。来週、聖霊降臨の祝いの礼拝に子どもたちと共にあずかるとき、そこで洗礼式が行われるとき、わたしたちは、そこに主のお集めくださった教会のあるべき姿を見る者とされたいのです。